

# 二度の巨大地震に見舞われたトルコ

## トルコの工業地帯を直撃

1999年8月17日午前3時2分（現地時間）、イスタンブールから東へ約100キロ、トルコ西北部の大都市－イズミット市（人口100万人）を震源としてマグニチュード7.4の大地震が発生した。この地域は国内最大の工業地帯であり経済の中心地でもあったためその被害は甚大なものとなり、おもな被災地のヤロワ市、ギョルジュク市、イズミット市、アダパザル市などでは、安全基準を無視した設計や軟弱な地盤を補強なしに建設された中高層のアパートを始め多くの建物が倒壊した。



全壊したアパートの解体工事を見守る被災者（デュズジェ市）

## 阪神大震災を大きく上回る被害

この地震が深夜に発生したこともあり、多くの人が逃げ遅れて倒壊した家屋の下敷きになった。トルコ政府の発表によれば、この地震による死者は17,100人、負傷者は44,000人、全半壊した家建物は340,000棟以上にのぼる。（阪神大震災の死者は5,520人）



食料配布を受ける被災者（デュズジェ市）

## 三か月後に再度の大地震

追い打ちをかけるように、先の地震から3か月後の11月12日午後6時57分、前の震源地から100キロ東のボル県を震源とするマグニチュード7.2の地震が発生。この地震による死者は845人、全半壊した建物は40,000棟以上。前回の地震で損傷した家屋が二度目の地震で倒壊し、被災者の数が激増することとなった。

## 路上でのテント生活

地震の直後からトルコ国内はもとより日本を含めた世界中から救助隊が派遣され、食料、医薬品、衣類などの配布がおこなわれた。しかし被害の規模が非常に大きく、また公共の建物の多くも倒壊したために、かろうじて命が助かった被災者も多くは避難する場所もなく、路上や空き地での生活をおくることになった。テントや手製の小屋での避難生活を強いられた被災者は、トイレ、シャワー、水道等不足に悩まされた。

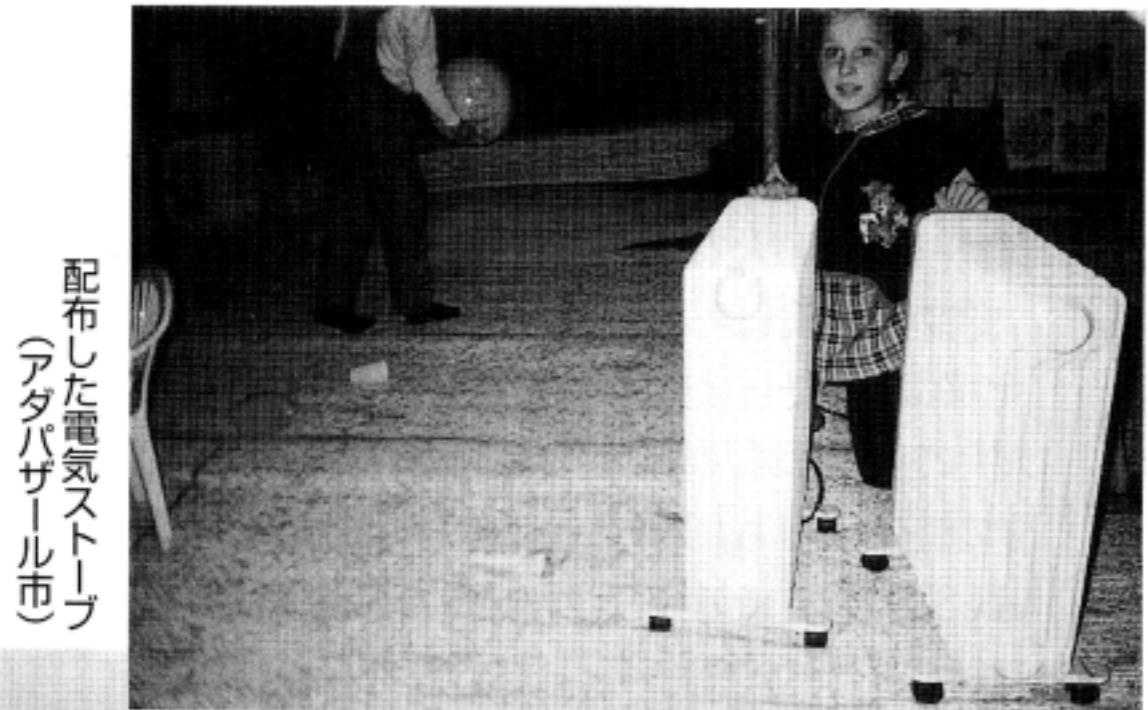
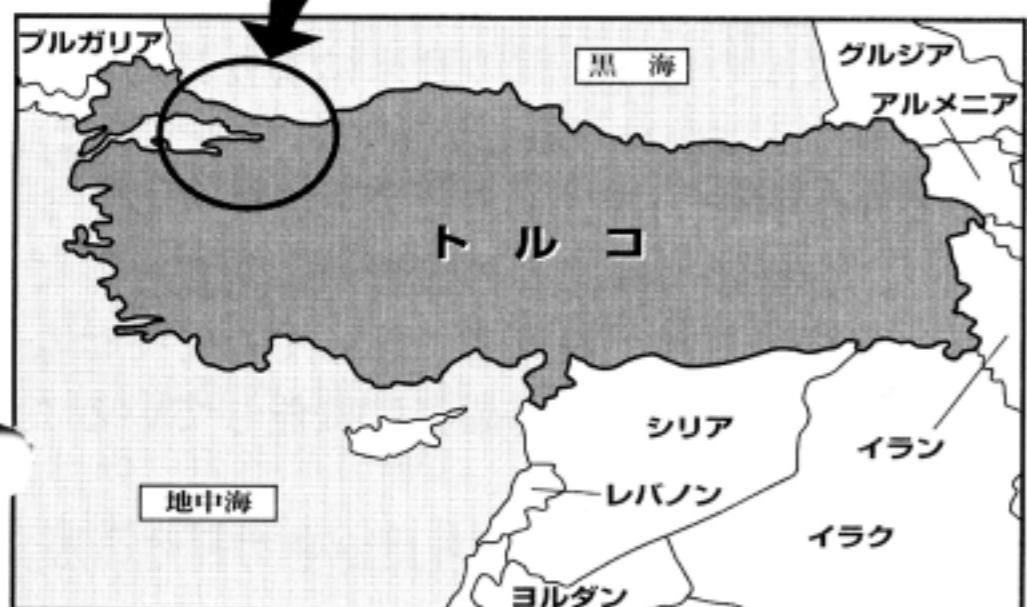
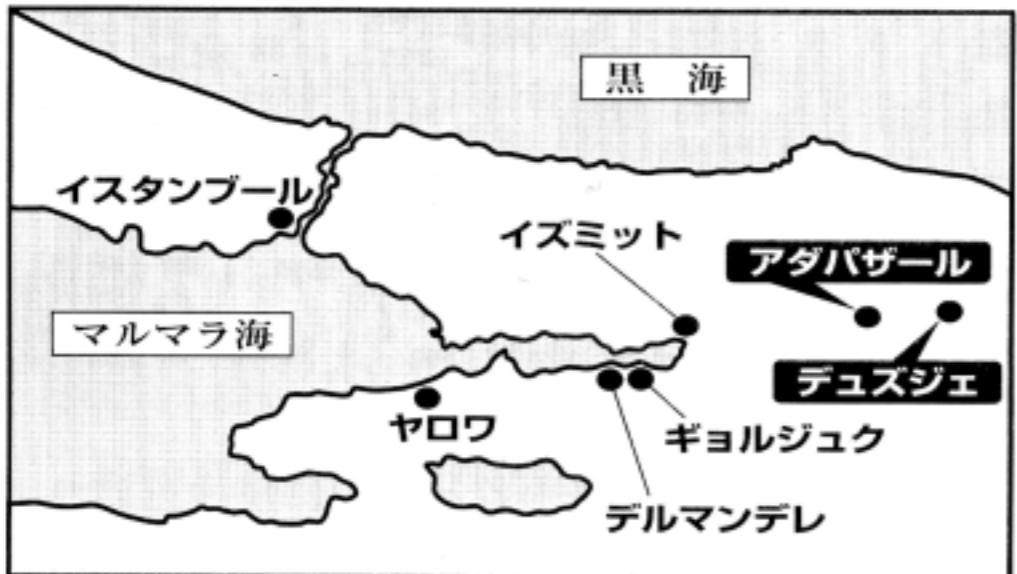
### SVA トルコ大地震救援活動一覧 (受益者総数約3,000戸)

#### アダパザール市（サカリア県）

- 地域暖房一式（ボイラー、配管、ラジエター）設置 2か所（受益者数182戸）
- 電気式ストーブ100台配布（子どものいる家庭、集会室等）（受益者数555戸）
- LPG暖房ストーブ25台配布（受益者数25戸）
- 温水シャワー8台、温水器2台、給水タンク設置（受益者数200戸）
- シャワー用湯沸器設置100台（受益者数100戸）
- トイレ・シャワー用上下水道工事一式設置 1か所（受益者数81戸）
- 女性用プロジェクト手工芸品材料配布（受益者数100戸）

#### デュズジェ市（ボル県）

- トイレ6人用2基、8人用1基、シャワー6人用1基（受益者数300戸）
- 毛布500枚（受益者数500戸）
- ポンチョ480枚（受益者数480戸）
- LPG暖房ストーブ500台（受益者数500戸）



# SVAはトイレ、シャワー、暖房器具等を支援

## 駐在員が3か月滞在

被害の大きさと救援活動遅れの情報を受け、SVAは8月27日にスタッフ2名を現地に派遣。アメリカのNGO、アメリカン・フレンズ・サービス・コミッティ（AFSC）の協力を得て、被害状況と救援活動の調査にあたった。帰国後、被害が大きいにもかかわらず救援活動が一番遅れている人口35万人の都市アダパザール市で救援活動をすることを決定。9月17日にスタッフ2名を事業開始のために派遣した。（内一名は12月始め迄の3か月間、駐在員として現地に滞在）

## 救援活動はトルコ人とチームを組んで

現地においては、この地震を契機にできた現地NGO、市民活動調整センター（CCC）の協力を得て、イスタンブールの同事務所内にデスクを開設。現地ボランティアの参加を得て、日本人スタッフとともに「SVAトルコチーム」を結成して活動した。同チームは使用資機材をトルコ現地で調達、被災地まで輸送し、現地においては、被災住民、トルコ赤新月社、行政当局と協力しながら配布、設置した。

## アダパザール市での支援活動

被災地での仮設住宅建設が遅々として進まない中で、トイレ、シャワー等の衛生設備、また冬の訪れとともにストーブ等の暖房設備が緊急に必要とされてきていた。SVAはアダパザール市において各種暖房器具の配布、下水工事、温水シャワーの設置をおこなった。

## 二度目の地震にも素早く対応

また、救援活動中の11月12日にボル県でおきた地震に対しては、翌日には被災地デュズジェ市に入り、トイレ、シャワーの設置、毛布、ポンチョ、暖房用のストーブ等を配布することができた。この素早い対応には被災者から多くの感謝が寄せられた。

## トルコ駐在日記から

横山葉子職員(9/17 より12/6迄 トルコ駐在)

### ユヌステント村、政府による強制撤去…

11月6日、SVAが支援していたユヌステント村にトルコ政府から強制撤去の指示がでた。伝えられた撤去完了予定日は2日後の11月8日だった。約2000人の住民が生活するテント村をどのように強制撤去できるのか…。

この住民の多くには行き先がない。政府や国軍、トルコ赤新月社管理のテント村への入居には全壊または半壊の罹災証明書が必要とされるため、諸事情により罹災証明書を持てない被災者は、街角の不法テント村や閉鎖後支援の止まった大テント村跡地などで生活しなければならない。その事を被災者たちは知っていた。しかし、皮肉にも2日後の11月8日、ユヌステント村は完全な跡地となり、地盤の滑り止めに使われていた小石の一つさえも撤去された。

### SVAトルコチームの思い

短い間だったが、ここで過ごした時間が全て強制撤去とともに片づけられ奪われたような無力さで複雑な思いだったのは私だけではない。その夜、SVAトルコチームはミーティングでさまざまな思いを語った。「この様に閉鎖されるテント村でも、私たちの支援した事は意味があったのではないか…閉鎖予定のテント村だからといってみんなが支援を避けたら彼らはどんな孤独で日々を過ごしちだらうか…。10日以上も食べ物が届かなかった日々、SVAを含む各団体からのボランティアが政府に食糧配給依頼を続けた毎日。やっとの思いで届いたわずかのパンでさえも何らかの力となつたはずだ…。」チームメンバーのこれらの言葉で私はようやく無力感から抜け出し、この活動の意義を感じることができた。

### 真夜中の物資配布活動

11月12日、二度目の激震がボル県を襲った。屋外で夜を明かす多くの被災者は暖房器具や毛布を求めるが、ここでは全ての救援物資がトルコ国軍管理体制となっていたため、被災者の手にはなかなか届かない。物資の配布が見つかると国軍に没収される恐れがあるので、活動はいつも夜中だった。多くの地元ボランティアやその他の方々と共に、一軒一軒のテントを訪ね、手から手へと届けた。いつも配布活動を終えるのは朝方だった。最終配布先では決まってチャイ（トルコ紅茶）を頂き、みんなで輪になり一日の活動を振り返る。

撤去されたユヌステント村の跡



# SVA実施活動を視察 —雪の被災地で生かされている援助

1月末に支援者、協力者とともに現地を訪れ、SVAのこれまでの活動を再度点検してきた。被災地では依然として仮設住宅の建設がなかなか進まず、気温の低下、雪の到来により長期にわたる避難生活はかなり厳しいものになっていた。そのような中で、SVAのおこなったトイレ、シャワー、各種暖房機器等の設置が、規模としては小さいながらも、被災者にとってなくてはならない重要なものとして確実に機能していることが確認できた。

視察参加者の声が次のように寄せられている。  
(要約)――

- 共生を望む同じ地球市民であることへの意識に立ったものの考え方こそが本当のNGO。そこに活動が生まれる。これがこのツアーを通して痛感し、学んだことである。（岡山県 Kさん）
- 圧倒的巨大な自然災害の後に残される被災地の惨状を前にして、私たちの善意の無力さえ感じるような現実の中で、SVAの諸事業は困難の中でも確かな事業として評価される。特に現地の方々との共同事業としての面は高く評価されるべきです。（東京都 Uさん）



夜中の毛布配布活動  
(デュズジェ市)

1月末、雪の中のテント村  
(デュズジェ市)

